

理論と経験

——古代医学における経験派の方法論——

金 山 弥 平

I. 古代医学における理論の位置

古代ギリシアの哲学者たちは、古くから医術に大きな関心を寄せてきた。タレスに始まる自然哲学の伝統のもとに、彼らは、自然現象の一つ、人体も研究対象とし、自分たちの理論によって生理学的な現象を説明しようとしたのである。例えばアリストテレスは、次のように記している。「健康と病気についてその諸原理を見極めることも、自然学者の仕事である。なぜなら、生命を失ったものには、健康も病気も生じえないからである。それゆえ、自然研究に携わる人たちの大部分と、医者の中でより哲学的に医術を追究して行く人々の間で、自然学者たちは、医術に関する事柄を論ずるにいたるわけだし、医者たちは医術を論ずるにあたって、自然に関する原理から出発することにもなるのである」(*De sensu et sensibilibus*, 436a17-22; cf. *De respiratione*, 480b28-30)¹⁾。哲学者による生理学的諸現象理論化の試みは、医者に対しても、単なる経験の域を脱して、医術を理論的に基礎付けるように促す。プラトンは『法律』において、経験のみに頼る奴隷の医者と理論をわきまえた主人の医者を区別して次のように語っている一世の中には、正真正銘の医者もいれば、医者と呼ばれるにすぎない医者の助手もいる。後者は、主人の指示、観察 (*theōria*)、経験 (*empeiria*) にもとづいて医術を体得しているだけであり、本当の医者のように、ものごとの本性 (*phusis*) に従って学んだわけではない。彼らは、それぞれの病気についてまったく説明をせず (*oute tina logon ... didōsin*)、むしろ経験からしてよいと思われる処置を、あたかも正確な知識をもっているかのように横柄な態度で指示し、そのまま去って行くだけである。これに対して主人である方の正真正銘の医者は、病気をその根源から、本性に従って調べ (*exetazōn ap'archēs kai kata phusin*)、患者ともその身内の人たちともよく話し合い、自分の方も、病人から何事かを学ぶと共に、その病人にもできるだけのことを教えてやる。そして何らかの仕方で相手を同意させるまでは、処置を施すことなく、同意させたときでも、説得の手段によってたえず病人の気持ちを穏やかにしながら、健康回復の仕事を行っていく」(*Leges*, 720a-e, cf. 857cd; Aristoteles, *Pol.* 1282a3-4)。『ゴルギアス』においてもプラトンは、弁論術や料理法が属する経験 (*empeiria*)、熟練 (*tribē*) から、技術 (*technē*) をきっぱりと区別し、その上で医術を、対象の本性や個々の処置の根拠を理解した

営みとして、技術に数え入れている。プラトンがこのような医術を高く評価する背景には、前5世紀から前4世紀にかけての医者による医術理論化の努力があったものと考えられる²⁾。

しかしまた、理論化の行きすぎに対しては、医術の初期の段階から反対の声も上がっていた。『ヒポクラテス全集』中の『古来の医術について』(前5世紀末から前4世紀の作と推定される)には、熱・冷・乾・湿などの自分勝手な仮設を立て、少数の原理へと病気や死の原因を還元しようとする医者に対する反論が見られる(第1節)³⁾。その論拠の一つは、病気は当の病人が被っているものであるから、説明を聞けば病人には思い当たるふしがあるはずであり、病人が聞いても分からないようなものを仮定してはならない、ということである(第2節)。それにまた、他の理論的学問と異なり、医術は、患者の体質の違い、病気の重さや種類の相違といった個性が大きく作用し、一律な理論適用が不可能な学問領域でもある。例えば、プラトンは『ピレボス』55e-58aにおいて、正確さ(akribeia)という観点から、技術の分類を行ない、正確さにおいて優れている諸技術——数学者の算数、一般の人の算数、建築術、造船術(順序は正確さの順に対応する)——と劣っている技術とに分類する中で、劣っている技術の内に、音楽、農業、航海術、将軍術と並べて医術も含めている。この分類において、正確さという点では確かに医術の価値は低いが、しかしそれによる見返りもある。航海術や将軍術において、風向きや戦況に応じて即座の判断が要求され、厳密に正確さを求めることはむしろ危険につながるように、また音楽においては演奏の失敗に、農業においては作物の枯死に通ずるように、医術においても、硬直化した理論は患者の死を招くものなのである(cf. Aristoteles, *EN*, 1094b11-14; 1098a26-31)。

ただ、『古来の医術について』をよく見てみると、過度の理論化に反対する側も、実は相手に劣らず思弁的な理論を展開していることが分かる。彼らの攻撃は、理論そのものよりも、理論の背後にある哲学的諸前提にあった。同書に「経験」「体験」という語は確かに現われるが(*empeiros*, 1,612,20 Littré; *peira*, 1,572,15 Littré)、しかし、この著書の主張は、経験を重んずるべきである、ということよりむしろ、医術こそが人間の本性や、人間が生まれてくる諸々の原因を正確に知ることができるのであって、医術が哲学から知識を借りるのではなく、哲学が医術に学ぶべきである、というものである(20節)⁴⁾。

II. 医療と経験——経験派の登場——

哲学からの援助を仰ぐのであれ、医術内部に基盤を求めるのであれ、理論化を推し進める態度は、結局、医者がそれぞれ異なる学派に分かれて相互に対立する諸説を展開する状況、実践より理論が優先される状況を生み出す。プラトン『法律』857dには、「医者の仕事は教育ではなく患者の治療であって、患者は医者になることを望んでいるのではなく、健康になることを望んでいるのだ」という意見が見られるが、実際これは、よく理解できない理論的説明を前にし

た患者や家族の偽らざる気持ちであったであろう。こうした中で、紀元前3世紀後半に自らを経験主義者(*empeirikoi*)と呼ぶ人々——医学上の経験派(*empeirikoi*, *empeirikê hairesis*)——が出現してくる(*Sub. emp.*, 49,6-7; 42,11-43,6)⁵⁾。彼らは理論を立てる諸派——これは一括して理論派(*logikoi*, *logikê hairesis*)と呼ばれる——に対抗し、経験のみによる医術構築を主張した⁶⁾。また医術の目的についても、理論の展開よりも治療、実践を重んじた(*Sub. emp.*, 80,23-82,20)。

そもそも理論的認識よりも、経験の方が実践において有効であることは、例えばアリストテレスも『形而上学』冒頭で指摘していたところである。彼は、知識を欲求する人間と動物の違いを論ずる中で、いかにして感覚から、記憶(*mnêmê*)、経験(*empeiria*)、そしてそこからさらに、人間に技術(*technê*)が生じてくるかを述べている。経験は同じものの多くの記憶から生まれるものであり、したがって記憶にあずかるごく一部の動物にも経験は備わるが、しかし、経験が生活において重要な役割を果たすのは、やはり人間においてである。経験は、カリアスがこの病気にかかっている時には、これが有効であり、ソクラテスの場合も同様であるし、また・・・の場合にも同様であった、という判断として現われる個別的なものであり、これに対して、経験によって得られる多くの観念から、似通ったものに関する一つの普遍的な判断が生ずるとき、技術——原因(*aitia*)を把握し、理論(*logos*)を所持している認識——が成立する。したがって、経験は知識(*epistêmê*)や技術に似てはいても、教えることのできないものであり、また知恵(*sophia*)にもあずかることのない認識である。しかし注目すべきことには、個別的なものに関わる行為に際しては、経験なしに理論のみを所持している技術者よりも、経験家(*empeiros*)の方が有効に行動できる、とアリストテレスは注意しているのである(A, 980a21-981b10)。

経験派は、自らを単に経験を積んでいるだけの「経験家」(*empeiros*)と区別し、経験を組織立てた(*sustêsamenoi tên empeirian*)ものとして、新しい用語「経験主義者」(*empeirikoi*)で自分たちを呼んだ(*Sub. emp.*, 49,3-7)。そこには単に有効に行為できるというだけでなく、経験に基づいて技術(医術)を打ち立てたという自負があると思われる。アリストテレスの考えでは理論、あるいは原因の把握がないと、技術とは呼べなかったが、経験派は、それらなしで技術を構築できるし、自分たちはそうすることによって、真に実践的な知識を身につけていると考えたのである。彼らは、理論派が提示する諸理論間の反目(*diaphônia*, *discordia*)を指摘、いずれかの理論を優先させることができないこと——反目は判定不可能(*anepikritos*)である——から、結局、事物の本性(*natura*)のような不明瞭な事柄(*adêla*, *obscura*)は把握不可能(*non comprehensibilis*)であり、医術は明瞭な事物の観察を通して構築されるべきであると主張した(Celsus, *De Medicina*, Prooemium, 27-8=Deichgräber, 92; *De sect. ingr.*, 11, 17-22)。

経験派が理論派批判の着眼点として用いた「反目」(*diaphônia*)は、ピュロン派懐疑主義者

が利用した論点でもあった。経験派とピュロン主義の共通点はいくつか指摘できる。ガレノス『経験派の概要』第11章では、経験派にとっての理想的態度を具現した人物として、日常の行為においては明らかな事柄に従い、それ以外の物事については未決定の態度を取りつづけたピュロンの名前が挙げられているし(82,20-83,3)、また経験派は断定を避けるべきであるとも主張されている(84,11-18)。さらに幾人かの経験派は、メノドトス、テオダス、セクストス・エンペイリコスなどのようにピュロン主義者でもあったし、またタラスのヘラクレイデスは、ピュロン主義の復興者アイネシデモスの師でもあった⁷⁾。さらに経験派が、自分たちはだれか一人の人の名前に因んで、例えばアクロン派と呼ばれるようなことはなく⁸⁾、精神的状態(*apo tês kata tēn psuchēn diatheseōs*)から「経験派」という名を得ているが、この点で懐疑派と同じだ、と主張していること、およびピュロンの弟子のティモンも経験派と関係づけられていることも(*Sub. emp.*, 42-43)、経験派とピュロン主義のつながりを示唆する論点として指摘できる。しかし、両者の関係が具体的にいかなるものであったかは、解決の困難な問題である。特に経験派でありピュロン主義者でもあったセクストスは、『ピュロン主義哲学の概要』(*PH* と略)第1巻236節以下において、両派の共通性を問題にし、経験派が不明瞭な物事の把握不可能を主張しているのは、懐疑派と一致しない、むしろ方法論派(*methodikoi*)の方が、不明瞭な物事の把握可能性について肯定も否定もせず、また、身体の情態の導くままに、いかなる想定も交えず治療を行ない、そして言葉遣いも非断定的である点で、最も懐疑派に近い、と語っている。この主張をどう理解するかは、解釈上の大きな問題である。

III. 経験派の立場

III-I. 経験

そこでまず経験派の立場の大筋を、ガレノス『経験派の概要』をもとに見ていこう。理論派が、経験(*empeiria*)と(理論的)開示(*endeixis*)⁹⁾を通して、多様な現象の背後にある諸原因を把握し、それによって様々の病気と症候を説明し、また治療にあたらうとしたのに対して、経験派は、理論的考察を拒否し、医術には体験(*peira*)とそれに基づく経験のみで十分であると主張した。しかし、素人でも体験を得る。経験派は、彼らの認識が技術であって素人とは異なることを示すために、彼ら独自の方法論を確立した。経験派の認識は、体験から出発する。先にアリストテレス『形而上学』冒頭の説明において見たところでは、経験は、カリアスがこの病気にかかっている時には、これが有効であり、ソクラテスの場合も同様であるし、また…の場合にも同様であった、という判断として現われる個別的なものであった。経験派は、この個別的経験から、「これこれの症状に対しては、これこれの治療が有効である」という形で普遍化・一般化を行なうわけではない。普遍化・一般化は、いまだ観察されていないものに対する断定——およびそのための理論的原因づけ——を含意する。経験派は、自分たちが治療におい

て依拠する「経験」(empeiria)を説明して、経験とは、法則性を得るために(theôrêmatik' einai)十分な頻度で現われた(つまり体験された)事柄の認識であり、体験の積み重ねと記憶によって、ある症状に対してこれこれの治療を施せば、常にこれこれの結果になった、あるいは大抵の場合にそうになった、あるいは半々の程度でそうになった、あるいは稀にしかそうならなかった、というように、成功の程度をも含めて知られた認識である、と言っている(*Sub. emp.*, 45, 21-26)。ここで注意しなければならないのは、「これこれの結果になった」(apebê, 45, 26; cf. eidomen, 58, 16)と、過去の事柄に関する認識として経験が語られていることである。経験は「法則的認識」(theôrêmatikon, theôrêma)とは呼ばれるが、「常にこういう結果になる」という一般化された認識ではなく、「今までのところ、常に、あるいは大抵の場合・・・そうになった」という認識であり、異なる場合に会えば、「常にそうになった」が「大抵の場合にそうになった」に変化しうる認識なのである。経験派が記憶(mnêmê)を重視して、自らを記憶派(mnêmonēutikê)と呼んだ¹⁰⁾のも、このためである。すなわち、経験は法則的認識であっても、それはあくまでもこれまでに蓄積された記憶——経験派が「見られた諸々の事柄の魂における残留」(tês en tê(i) psuchê(i) tôn ophthentôn monês, 50, 31-51, 1)と規定するもの——に基づく認識であり¹¹⁾、そこから経験は、「しばしば同じ仕方で見られた事柄の記憶」(mnêmên tôn pollakis kata ton auton tropon ophthentôn, 50, 23-5)とも定義されるのである。彼らは、この経験に依拠して医療を行ない、またこうした複数の経験が集まって医術全体が成り立つと考えた(46, 31-2)。

III-II. 体験から経験へ

経験が成立するためには、同じ事柄がある程度十分な頻度で現われ、それによって、何かを適用すれば常にある結果が生ずるのか、大抵の場合に生ずるのか、半々程度に生ずるのか、稀にしか生じないのか、いずれかに区分できることが必要である。そのような区分がまだ成り立たない認識も、一応は経験と呼ぶこともできるが——経験派は実際上の区別が曖昧にならないかぎりは、名称にこだわらない¹²⁾——、しかしメノドトスはこれを、法則的認識としての経験とは区別、単一の最も単純な経験であるとして、個別的(部分的)な経験(empeiria kata morion)と呼んだ(*Sub. emp.*, 46, 13-21)。個別的経験がいくつ繰り返されれば、法則的認識としての経験が成立するかについては、「堆積の議論」(sôritikê, 47, 1-4)と呼ばれる難問が提起されている。それは一つの個別的経験で法則的な経験となるか、二つではどうか、三つでは、四つでは・・・と尋ねていき、どれだけ経験が積み重なっても法則的認識としての経験とはなりえないことを指摘する議論である。この難問に対して、経験派は同様の問題——例えば、髪が1本抜けければ禿げ頭になるか、2本抜ければどうか・・・——を指摘し、後者の問題を難問とするか否かを問いかける。もしも後者を難問としなければ、経験に関する問題も難問ではないし、経験に関する問題が難問であるとしたら、難問に直面しているのは経験派に限られない

のである¹³⁾。ピュロン主義者について、彼らは「一つではどうか、二つではどうか・・・」と議論が進行する中で、問いかけられても答えを与えず、「自分には分からない」と判断を保留しつつ、議論が全体として与えられるのを待つ、と語られている¹⁴⁾。経験派も議論がすべて出されるのを待って、上記のように答えるのであろう。それにまた、経験派は、正確にいくつの個別的経験で法則性が得られるか分からなくても、大体いかなる頻度で同じことが経験されているなら、治療において役に立つ法則的認識とみなすことができるかを、経験的に知っている、と思われる。アリストテレスも言うように、あらゆる場合に同じ程度の厳密性を求めるべきではなく、製作や行為の有効性に必要な厳密性は、例えば数学において求められる厳密性より劣っていて何ら差し支えないのである（EN, 1094b11-14; 1098a26-31）。

法則的な経験であれ、個別的経験であれ、それらは体験（*peira*）から成り立ち、それゆえ医療は体験から成り立っていると言われる（*Sub. emp.*, 44,4-6）。ところで、この体験と個別的経験の関係はいかなるものであろうか。はっきりとしたことは言えないが、「体験とは厳密には、ある事柄の一回だけの非理論的な検分（*dokimasia alogos*）であり、経験とは同じ事柄の頻繁な検分である」（124, 35-37 Deichgräber）という言葉から見るかぎり、厳密には（*kuriôs*）体験と経験とは異なるが、しかし両者をそれほど厳格に区別する必要はないと経験派が考えた、とも想像される。経験派は名称にはこだわらないのである。

それはともかく、経験派は、医療成立の基盤となる体験を次のように説明する（*Sub. emp.*, 44,12-45,21）——体験とは、何らかの事柄の実見的（自分の目で見て得られた）認識（*autoptikê gnôsis tinos*）であり、感覚によって得られるものである（44,6-10）。この体験は、

- (1) おのずから（*apo tautomatou*）生ずる遭遇（*periptôsis*）——それはさらに
 - (1-a) 鼻血が出て熱が下がる場合のように、自然に（*phusei*, *phusikôs*）起こる遭遇と、
 - (1-b) 後頭部に痛みのある人が転んで、前額静脈から出血し痛みが収まる場合のように、偶然に（*tuchê(i)*, 運よく）出会われる遭遇がある——
- (2) 即席の体験（*autoschedia peira*）——
 - (2-a) 欲求に駆られて（*di' epithumian*）水を飲んだりした場合や、あるいは
 - (2-b) 山の中でほかに治療薬がないときに、獣にかまれた傷口にある草を貼って傷が治った場合——
- (3) 模倣による体験（*mimêtikê peira*）——法則的認識が成立する頻度ではないが、しかしともかくしばしば同じ仕方で現われている事柄を試してみる場合——
- (4) 熟練による体験（*tribikê peira*）——熟練した技術者（*technitês*）にのみ可能な体験——がある。

すでに見たプラトン『ゴルギアス』においては、経験が技術と区別される際に、熟練（*tribê*）も技術と相容れないものとして区別されていた。これに対して経験派は、(4)で必要とされる熟練を非常に高く評価する。熟練家（*tribôn*）とは、完璧に修練を積み、何度も実地に試された学

説を習得している人である(65,13-15)。熟練による体験は、経験によって発見された物事との何らかの類似性に基づいて得られる、と語られている(45,19-21)。「何らかの類似性に基づいて得られる」(gignetai kath' homoiotêta tina)とは、経験派が医術構築のために用いた方法の一つ、類似するものへの移行(hê kat' analogian metabasis, 48,9-10; hê tou homoiou metabasis, 49,13-14)を指す表現である(cf.49,16-19)。すなわち、単に個人的な体験だけでは得られる認識に限りがある。医術が技術として成り立つには、一人の人生では短すぎるのである。Ars longa, vita brevis (ho bios brachus, hê de technê makrê, Hippocrates, *Aphorismi*, 1=4,458,3 Littré)。しかも、限られた体験の中には医術構築に無益な体験も数多くある。そこで経験派は、自分の目で見ることによって得た経験——これを彼らは「実見」(autopsia)と呼ぶ——に加えて、有効な体験を獲得するための方法として、記録(historia)および類似するものへの移行を導入した(49,10-19; 64,16-19)。

記録とは、過去の人々が自ら実見した事柄の書物における報告であり(65,31-66,5)、類似するものへの移行とは、既知の経験との類似性に着目して、同一の治療を類似の部位(腕から大腿部)に適用したり、類似の疾患(下痢から赤痢)に適用したり、また通常の治療が効果を上げない場合に、類似の薬(リンゴからセイヨウカリン)に移行したりする方法である(cp.9)。ここで注意しておかねばならないのは、記録も、類似するものへの移行も、医者自身の体験による確認を必要とする、という点である。記録について言えば、先人の記録がすべて真実であるとはかぎらない——例えば、理論的に説得的な事柄をそのまま鵜呑みにする理論派がいる(64,31-32)——から、記録されている事柄を自分の目で実見し、確認することが必要になってくる(64,27-65,4; 66,26-33)。しかし、すでに実見している事柄であれば、新たに学ぶためには役に立たないし(67,7-17)、また記録に記されている事柄を後から実見によって確認する場合でも、その前にどの記録を信用し、応用したらよいか判定しておく必要がある。そのための最も有効な規準として、経験派は第1に、意見の一致(sumphônia)を挙げた(67,18ff.)。sumphôniaとは、経験派が理論派の諸理論を斥ける根拠とした、諸理論の反目(diaphônia)と反対の概念である。経験派は、理論の提唱者が不明瞭な事柄について論ずる際にどうしても互いに反目する状況を、言わば反面教師として、この規準を採用したと考えられる。しかも、意見の一致を規準とするに際して、経験派は二つの注意事項をさらに付け加えている。(A)第1に、不明瞭な事柄に関する一致であってはならず、感覚可能な物事に関する一致でなければならない(67,29-68,23)。(B)第2に、意見の一致を規準とする理由は、事柄の本性がそれ自体そうになっているから、という理由であってはならず、むしろ、明瞭に現われる物事において意見の一致を見ている場合に、一致している事柄が真実であることが体験されているから、という観察に基づく(apo tērêseôs)理由でなければならない(68,23-69,10)。こうして、経験派が意見の一致を記録判定の規準として用いる場合にも、(A)体験できる事柄について、(B)体験したところに基づいてという、体験を重視する立場は貫かれているのである。

同じことは、記録判定の規準として挙げられる第2のもの、執筆者の知恵と習慣についても、第3のもの、我々が実見を通して認識している事柄と似ているかどうか、についても言える（69,12-28）。執筆者についての判断は、他の著作でその人が述べている事柄が自分の体験と一致しているかどうかによって判断されるわけだし、また我々の実見との類似が、自分の体験（実見）に基づく規準であることは言うまでもないであろう。つまり、第2、第3の規準を用いるためには、自分自身豊富な経験をもっていることが必要とされるし、また、第1の規準を用いる場合でも、事実、例外なく意見が一致していることを見極めるためには、豊富な読書量が要求されるのである。記録の正しい利用が熟練を要する（65,1-21）のは、そのためである。

体験、および熟練が必要とされるのは、類似するものへの移行を適用する場合も同様である。経験派は、熟練的体験をまだ得ないうちは、類似するものへの移行は真実の可能性があることを約束するだけであって、それを真なるものとして信用してはならない、と述べる（71,13-25）。また、いかなる点で類似しているかによって信頼できる度合いは変わってくる。例えば、形や色や硬さ・軟らかさの類似よりも、匂いや味の類似が、薬効の同一性をより多く保証するが、これも、これまでの観察（*tetêrêtai*）に基づいて確認されているからそう言えるのである（71,25 ff.）。さらに、類似している味（例えば、収斂性の味）でも、アロエの収斂性と銅の薄片の収斂性とは異なっており、それらの固有性にも注意を払うことができればならない（72,8-29）。そしてこれらすべての基礎には体験があるのである（*echomen gar peiran ...*, 72,28）。

こうして記録、および類似するものへの移行の適用に関して、次のようにまとめられることになる。（i）大多数の信用に価する人が記録し、我々が稀にはあっても発見しており、しかも体験を通して知られていることと類似している事柄は、我々自身が体験して発見した事柄と同等の信憑性をもつ。（ii）これに対して、記録における意見の一致だけ認められる場合は、期待される度合いはより低くなるし、（iii）さらに、我々が一、二度見たことはあるが、意見の一致はなく、信頼できる人が一人だけ証言している事柄の場合は、なおさら期待度が低下する（74,31-18）。この期待度の順位づけもまた、物事の本性によって導かれたものではなく、経験派自身の観察に基づく事柄であることは言うまでもないであろう。

彼らはこうして自分たち独自の方法論を整備し、感覚的体験、経験、およびその記憶のみに頼ることによって、自分たちの知識を技術という名にふさわしいものに仕上げていった。あるいは、少なくとも彼らはそう主張した。しかし彼らは本当に、「経験のみ」という立場を貫いたのであるのか、あるいは貫きえたのであるのか。理論を排したとしても、何らかの意味で理性は用いていないのか。そして理性を用いたとしたら、それは経験のみという彼らの立場とどう関わるのか。また理性の使用という点に関して、懐疑派との関係はどうなるのか。

これらの問題を見る前に、『諸学派入門』第2章に認められる体験の分類も見ておこう（*De sect. ingr.*, 2,12-4,17）。そこでは体験は、

(1) 意図しないで（*aboulêtôs*, 2,27）出会われる遭遇（*periptôsis*）——さらに下位の分類は、

- (1-a) 自然的 (phusikon) な場合 (汗や鼻血が出たり, 下痢になったりして治る) と,
 (1-b) 偶然的 (tuchikon) な場合 (たまたま転んで出血して治る) ——,
 (2) 即席的な (autoschedion) 体験 (ここでは「経験」と記されているが, 実質は体験と同じ),
 (3) 模倣による体験 (mimêtikon),
 (4) 熟練の体験 (tribikê peira) ——類似するものへの移行に随伴する体験——

に分類される。この点は『経験派の概要』の場合と同じであるが, 事例が一部異なっている。すなわち, 『経験派の概要』において, 即席の体験に数えられていた, (2-a) 欲求に駆られて水を飲む場合が, 『諸学派入門』では, (1-b) 偶然的体験に数えられ, その代わりに即席的体験として, 夢によって促されたり, あるいは何かそういった仕方だと思いついて, 自発的に何かを試みようとする場合が挙げられている¹⁵⁾。この違いはどこから来ているのであろうか。

『諸学派入門』における (1) 遭遇と (2) 即席的体験の区別において顕著なのは, 体験者の意図, 自発性, 選択決定の有無である (aboulêtôs, 2,27; hekontes, 3,3; ek prohaireseôs hêmeteras, 2,19)。もしも意図, 自発性, あるいは選択が成立するためには欲求のみならず, 理性的な判断も要求されるとするならば (cf. doxazontes, 3,4), そして欲求に駆られて行動に出る場合には, 理性とか思考の介在を必要としないならば, 欲求 (動物的欲望; epithumia) に駆られて水を飲む場合は, 意図してなされた行為とはみなされず, したがって即席的体験に数えられないことになる。実際, アリストテレス, およびストア派においては, 動物は, 感覚的表象と欲望 (epithumia) に促されて行動するだけであり, そこには意図とか選択は認められず, その活動も行為 (prattein) とは呼びえなかった。これに対し, 人間の場合は, 理性 (nous) や思考 (dianoia) をもっているため, 欲求 (orexis) や衝動 (hormê) はあるとしても, それは理性的欲求としての boulêsis (希求, 意図) であり, その行動は意図や選択に基づくものとみなされ, 行為と呼ばれうる¹⁶⁾。これに対して, 『経験派の概要』の分類は, このような意図や選択を云々しない。そこでは, たまたま何かが起きて治った場合 (1) には該当せず, 行為者が何らかの仕方に関与していると認められる事例で, 模倣による体験 (3) や熟練の体験 (4) とは認められないものはすべて, 即席の体験とされているのである。先に挙げた意図, 自発性, 選択の三つの内, 自発性 (hekousion) についてストア派は, 動物に自発性, あるいは責任を認めないが, アリストテレスは動物にもそれを認めている¹⁷⁾。アリストテレス流の解釈によれば, 欲求に駆られて水を飲むことも単なる受動的出来事ではなく, 自発的な試み——すなわち即席の試み——とみなされるであろう。もちろん経験派は, 動物や人間の行動に関して, ストア派とかアリストテレスの立場を採用するわけではない。むしろ, 二つの異なる分類が行なわれていることは, 彼らにとって分類の仕方は, 事柄が明確になりさえすればどうでもよいことを意味する。すでに注意したように, 経験派は, 名称にも分類の仕方にもこだわらないのである¹⁸⁾。

このように『諸学派入門』における即席の体験の背後には, 思考, あるいは理性による決定, 選択があるように思われるし, また『経験派の概要』における即席の体験においても, 少なく

とも、獣に噛まれた傷口にある種の草を貼り付ける際には、これを試みてみようという思考、選択が介在していると考えられる。さらに、模倣による体験や、熟練の体験において、ある種の思考が働いていることは明らかであると思われる。経験のみに医術を基礎づけようとする経験派は、このような思考ないし理性の使用を、自分たちの立場との関連においてどう考えたのであろうか。

IV. 経験派と理性

ところでここで「理性」という場合、英語では *reason* という言葉がそれに当たる。ギリシア語で正確に対応する言葉を見つけるのは困難であるが、ある意味での *logos* がそれに当たると思われる。ガレノス自身、『経験派の概要』第12章において、医術構築のためには明瞭な感覚 (*aisthêsis*) と記憶 (*mnêmê*) のみで十分であるか、理性能力は必要ないか、という問題を扱う際に、理性に言及するのに *logos* という語を用いている。ところが、*logos* には「理論」という意味もあり、理論派はギリシア語では *logikoi* と呼ばれていた。こうして、経験派と理性の関係の問題は、経験派と理論派の間の歩み寄りの問題にも通ずることになる。

さらにまたこの問題は、経験派に関するセクストスの発言をどう解するか、という問題とも関わってくる。セクストスは、医術における経験主義とピュロン派懐疑主義を比較し、もしも経験派が不明瞭なものの把握不可能について確言するのであれば、経験主義は懐疑主義と一致しないし、懐疑主義者が経験主義を採用するのはふさわしくないであろう、むしろ方法論派の方が、不明瞭なものの把握可能・不可能について性急に断定していないと思われる点と、また懐疑主義流に、現われにしたがって有益であると思われるものを採用している点で、懐疑派が追究することのできる学派であると思われる、と語っている (*PH*, 1, 236ff.). なぜ、自ら経験派で「エンペイリコス」(経験主義者) と呼ばれたセクストスが、このように経験派に対する否定的発言を行なっているのであろうか。

IV-I. Frede の解釈

経験派と理性の関係について、Frede は次のように考えている——経験派も、結局は今日我々が理性の働きとみなす働きを認め、医術構築におけるその役割を容認しなければならなかった。例えば、既存の治療法を適用する限りでは、過去の経験のみで十分だとしても、新しい治療法発見の試みにおいては、よっぽどかたくなに理性を拒絶するのでなければ、何らかの理性能力の行使がどうしても必要になる。一例を挙げると、ある病気の治療薬としてA, B, Cという薬品があって、そのそれぞれが必ずしもすべての人に効くわけではない場合、できるだけ多くの人に効くようにA, B, Cすべてを混合してみるであろうが、この混合を促した推論はだれでも行なうようなごく自然な理性の行使である (*De meth. med.*, X 163, 14ff. K=

149, 11ff. Deichgräber)。後期の経験派は、このような理性の働きを容認するにいたる。

ところが(Frede の説明が続く)、感覚(あるいは観察)と記憶のみという立場を厳守する初期の経験派(例えば、事実上の経験派の創始者であるセラピオン、前200年頃)は、新しい治療法発見においても、理性能力の行使を認めようとはせず、夢や偶然が新薬発見のきっかけになると主張する¹⁹⁾。しかしそのような彼らでも、今日理性能力の行使とみなされている活動の内、いくつかのものは、医術構築のためにどうしても認めざるをえなかった。例えば、経験の一般化と、一定の症状に対して一定の治療を適用するように指示する心的な働きである。そこで、理性能力を認めない彼らは、このような働きを記憶能力に帰属させたのである。経験派の別名「記憶派」(英語では memorists)を用いて、記憶能力の働きを拡張するこのような立場を memorism と呼ぶなら、彼らの memorism は次のようなものであった²⁰⁾。

- (a) 一般的観念の形成——記憶は第1に、今観察しているものを、過去に観察したものと同類のものとして認知する働きをもつ。すなわち、何物かを人間として認知することは、今感覚しているものが、以前何度も見た種類のものであることを思い出すことであり、そして何度も人間を感覚すれば、理性の働きがなくてもおのずから、記憶を通して「人間」という一般的観念が成立するのである。
- (b) 一般命題の形成——第2に記憶は、個別命題の一般化を行なう。すなわち、個々の人間について得られた、これこれの顔色をしているという観察が、幾つも記憶に蓄積されることによって、人間一般がこれこれの顔色をしているという一般的認識が、やはりおのずから形成される。この一般的認識には、かなり複雑な種類のものも含まれる。例えば、ある人について、何らかの顔色を観察し、記憶するとともに、この人がその後発熱し、また腹痛を起こしたこと、および、この顔色になる前に、日光に長くあたっていたことをも観察し、記憶することによって、そして他の多くの人についても、同じ観察と記憶を積み重ねることによって、ある種の顔色はしばしば長期間日光に曝されることに続いて起こり、またその後ではたいてい発熱と腹痛が起こる、という一般的認識が生まれるのである。
- (c) 症状から治療への(推論のような)移行——そしてこのような複雑な一般的認識の延長線上に現われるのが、第3に、例えば modus ponens を用いた理性的推論に匹敵するもの——ただし理性の働きではない——である。なぜなら、ある種の顔色に先行する事態と随伴する事態に関する記憶は、ある種の顔色を見た医者に、この人は日光に長くあたったはずであるとか、たぶん腹痛を起こすであろうとかいう考えを自動的に示唆するからである。

Frede は、ギリシア哲学にはこの memorism に連なる伝統があり、初期の経験派はこの伝統を受け継いだのである、そして、理性の働きと有効性を認めない点、および感覚と記憶の信憑性について疑問を差し挟まない点、さらには観察不可能な事物の把握不可能を主張する点で、ピュロン主義とは無縁の存在であったと主張する²¹⁾。また、理性の働きをまったく認めない以上、

初期の経験派は、明瞭な物事に関する理性的推論——彼らが *epilogismos*（移行推理）と呼ぶもの——も認めないことになる。

これに対して後期の経験派（前75年頃のタラスのヘラクレイデス以降）については、Frede は次のように考える。後期の経験派は、ピュロン主義の影響下に理性の能力とその働きも認めるにいたった。懐疑主義が理性能力の容認を促したというのは奇妙に聞こえるかもしれないが、古代懐疑主義は、むしろ理性能力の否定を独断とみなし、日常の生を重んずる立場から、通常用いられる理性能力を容認した。後期経験派もそれにならい次のような立場を採った。

- (d) *epilogismos* の使用——後期経験派は、明瞭な事物に関わる自分たちの推論を *epilogismos* と呼び、理論派の不明瞭な事物に関わる推論——*analogismos*（類推推理）——と区別したと言われている（*Sub. emp.*, 62,21-63,1; *De sect. ingr.*, 11,8-10）。この *epilogismos* が、後期の経験派が容認した理性使用にあたる。
- (e) 経験と記憶に対するある種の懐疑——後期経験派は、経験と記憶を過信せず、これらに対してもある程度の懐疑を保持した。
- (f) 把握不可能を主張しない——また理性能力の使用を認め、いつか現われの背後にある真理を理論的に把握できるかもしれない、ということも認めた。

こうして後期経験派は、現実の医療においては、明瞭な事物に関わる *epilogismos* を用い、新治療もそれを用いて発見しようとしたのである²²⁾。Frede によると、後期経験派は理論派にかなり近い立場をとったことになる²³⁾。

経験派と懐疑派とは一致しないというセクストスの発言については、Frede は、セクストスの批判は初期の経験派にのみあてはまり、セクストスが属していた後期の経験派にはあてはまらなと主張する²⁴⁾。初期の経験派が、不明瞭なものの把握不可能を主張し、理性能力の存在を否定したのに対して、後期経験派は、ピュロン主義と同じくそのいずれをも独断とみなした、というのである。

IV-II. Frede 解釈の検討

この Frede の解釈は非常に興味深いものであるし、また経験派の立場がピュロン派懐疑主義の影響を受け変化していったという意見も、何かしら説得的ではある。しかし話はそんなに簡単ではなく、経験派とピュロン主義の間にはもう少し微妙な関係があったように思われる。例えばセクストスは、不明瞭な事物の把握不可能を、初期経験派だけの立場としては語っておらず、むしろ経験派全体の立場として語っているように見受けられるし、他の人々の証言も同様に解釈できる²⁵⁾。

もう少し詳しく Frede の挙げる論拠を検討してみることにしよう。Frede は新薬発見のプロセスに関して、ガレノスの『治療学の方法』第10巻を参照し（X 163,14ff.K=149,11ff. Deichgräber）、経験派が発見に至る道として、第1に夢による示唆（*ex oneiratōn*）、第2に偶

然的混合 (kata dê tina tuchên),そして第3に、先に言及した epilogismos による方法——つまり A, B, Cすべてを混合すればいずれかが効くであろうという推理——が語られていることから、ある経験派は、偶然という新薬発見の道に固執することによって、いかなる推理・推論も排除しようとしたのであろうと考える。また、すでに紹介した『経験派の概要』と『諸学派入門』における体験の分類において、明確な形では推理・推論という可能性に言及されていない点も指摘、さらに『経験派の概要』第12章において、経験派と理性との関係が問題にされるとき、理性能力を容認した経験派としてガレノスが名前を挙げている最も古い人がヘラクレイデスであることから、おそらく彼以前の経験派は、理性を完全に斥けたのであろう、と結論づける²⁶⁾。

先に経験派は経験を蓄積する方法として、実見と記録と類似するものへの移行の三つを活用したことを述べたが、もしも初期の経験派が、理性の使用を完全に斥けるとしたら、類似するものへの移行も後期の経験派の方法論に限定されることになる。そして実際、Frede はそのような立場をとるのである²⁷⁾。彼は、初期の経験派セラピオンと類似するものへの移行の関係についての、メノドトスの報告——セラピオンは、類似するものへの移行を医術の構成的部分とは考えていなかった——と、カッシオスの報告——セラピオンは類似するものへの移行を利用しさえしなかった (*Sub. emp.*, 49,23-50,2)——に言及することにより、初期の経験派は実見と記録しか利用しなかったと主張する。

しかし、以上の Frede の論拠にはいずれも疑問の余地がある。第1に、『治療学の方法』を実際に見てみると、経験派による発見の三つの道が列挙されているにすぎず、ある経験派がそれらの内のいずれかに固執したなどとはどこにも記されていないのである。確かに、夢による示唆と偶然的混合を発見の手段として語るのは見え見えのナンセンスだ、というガレノスの発言の後に、epilogismos が語られており、このことは、最初の二つの手段に代わって epilogismos が採用されたことを示唆するようにも思われる。しかしガレノスは、epilogismos の手段によって得られた新薬についても、期待された結果をもたらすものではない、と批判を行なっている。ガレノスにとっては、三つの発見手段いずれもが批判の対象となり、論点は異なっている、いずれも経験派の弱点として認められるものなのである。最初の二つの手段と最後の epilogismos の手段が、経験派の異なる人に割り当てられるということも、経験派のどれかが前二者よりも最後の手段を好んだということも、『治療学の方法』の当該テキストからはどうしても読み取れない。

さらにこの発見の三つの道は、体験の3分類から、(1-a) 遭遇の内の自然的体験と、(3)模倣による体験を抜かしたものにすぎず、体験の分類の応用であると考えられる。すなわち、発見の方法の一つ、夢は(2)即席の体験の1例であるし、偶然的混合は(1-b)に相当、また epilogismos による薬品混合の方法については、熟練による体験が、類似するものへの移行に続いて得られる体験であり、そして類似するものへの移行がテオダスによって epilogismos 的体験であると

規定されているところから (*Sub. emp.*, 50,2-5), これが, 熟練による体験と完全に一致はしなくても, 少なくとも (4) 熟練した医者を行なう処置であることは明らかである。(1-a) 遭遇の内の自然的体験と, (3) 模倣による体験が省かれていることについては, 前者は, 医者や患者の意図と関係無くいわば外から起こってくることであり, 後者は, すでに発見済みの認識に基づいて同じ体験を繰り返してみることであって, どちらも新しいことの発見には役立たない以上, 発見のコンテクストにおける省略は当然である。

このことは何を意味するか。Frede は、『治療学の方法』の発見の3方法を『経験派の概要』と『諸学派入門』における体験の分類と比較し, 後者の分類においては, 明確な形では推理・推論という可能性に言及されていないと主張するが, しかし, 『治療学の方法』の第3の発見方法である *epilogismos* が, 理性的推論・推理を含んでいるとすれば²⁸⁾, 発見の3方法の元になっている体験の分類においても, 熟練による体験が, 理性的推理——*epilogismos* 的体験としての類似するものへの移行——を含んでいることは明らかであり, 『治療学の方法』における発見の3方法への言及と同様の理性的の使用への言及は, 『経験派の概要』と『諸学派入門』における体験の分類の内にもあるのである。もちろん, Frede の言うように, 理性的な推論としての明確な言及ではない²⁹⁾。しかし, 少なくとも, 熟練的体験が, 類似するものへの移行に随伴するものであることは明確に語られ, そして先程も述べたとおり, 類似するものへの移行は, 経験派によって *epilogismos* 的な体験であることがはっきりと意識されているのである。それにまた, 発見の三つの方法が体験の分類の応用であってみれば, 発見の方法のうちに偶然が数え上げられているのも, 当然のことであって, ある経験派が執拗に理性の役割を拒否しようとしたことの証拠にはならない。

しかしなお, 次のように反論されるかもしれない。類似するものへの移行を *epilogismos* 的な体験だとしているのは, 2世紀前半のテオダスではないか (*Sub. emp.*, 50,2-5)。つまり, 熟練的体験の内に理性的推論を読み取ったのは, ヘラクレイデス以後の後期経験派であって, ピュロン主義の影響の元に明瞭な事物に関する理性使用を認めた後, 初めて可能になったとも考えられるのである。初期の経験派はいかなる理性使用も禁じた, という可能性はまだ残っている。それに, 熟練的体験それ自体も, それが, 類似するものへの移行を含むようなものであるとしたら, 初期の経験派は, 経験の基盤となる体験の内に, 熟練的体験を数えなかったのかもしれない。特に, 初期の経験派セラピオンについて, メノドトスが報告するように, セラピオンは, 類似するものへの移行を医術の構成的部分とは考えていなかった, あるいは, カッシオスが報告するように, セラピオンは類似するものへの移行を利用しさえしなかった (*Sub. emp.*, cp.4) のであれば, その可能性はなお高くなる。

しかし, これに対しては次のように答えることができる。まず, 経験派は, 体験のみを基盤として技術を打ち立てると自負しているが, もしも体験が, 遭遇と, 即席の体験と, 模倣による体験に限られ, 類似するものへの移行に随伴する熟練的体験を含まないとすれば, たとえ記

録を活用したとしても、体験の範囲はかなり限られることになるであろう。経験あるいは熟練について、プラトンが『ゴルギアス』で語っていたのとはまったく異なる立場をとり、熟練は技術としての地位を確実にもつと主張するためには、経験派の実質的創始者セラピオンは、素人の体験以上の何かを熟練に与えねばならなかったはずである。そのために、記録の正しい利用とともに(65,1-21)、類似するものの固有性を見極め、正しく移行を行ないうる能力を熟練に認めたことは十分ありうるのである。

それにまた、セラピオンに関するメノドスとカッシオスの報告については、別の読み方が可能である。すなわち、カッシオスの報告として言及されていた、類似するものへの移行の拒否は、セラピオンが行なったこととしてではなく、カッシオス自身の立場と解することも可能である³⁰⁾。また、たとえカッシオスの主張が、セラピオンが類似するものへの移行を拒否したというものであり、メノドスの主張も、セラピオンは類似するものへの移行を医術の構成的部分と考えなかったということであるとしても、なお次のように言うことができる——従来問題とされてきたこととしてここで言及されているのは、セラピオンが、(1)類似するものへの移行を医術の構成的部分と考えたか、それとも(2)類似するものへの移行を利用しただけか、ということであり、メノドスが否定していると言われているのは(1)であるから、(2)は否定されてはいない。しかも、セラピオンについて、(1)か(2)かという問題が設定されうるということは、セラピオンが何らかの形で類似するものへの移行に関わったことを示唆する。これに加えて、セラピオンが経験派の創始者であり、類似するものへの移行が経験派において経験を広げる意味で大きな意味をもったことを考えあわせれば、セラピオンが類似するものへの移行を利用したことは、確実だと思われるのである。セラピオンについて、彼は「三原理論」(Dia triōn logos)を提起したと言われているが(83,20-22)、三つの原理が実見と記録と類似するものへの移行を指すと考えられることも、この解釈を支持する。

Frede はまた、『経験派の概要』第12章において、理性能力を容認した経験派としてガレノスが名前を挙げている最も古い人がヘラクレイデスであるという事実(87,11-15)を、彼以前の経験派が理性を完全に斥けたことの根拠とするが、しかし、理性能力をいかなる意味で容認したのか³¹⁾、より詳細な検討が必要とされる。一步譲って Frede の言うとおりに、理性能力を容認した最初の経験派がヘラクレイデスだとしても(ただしこれも確実ではない)、理性能力を容認するということが、理性能力の存在を主張することであるとすれば、彼以前の人がたとえ理性能力を容認しないとしても、それは理性能力の存在を主張しなかった、ということにすぎず、理性の行使とみなされる推論を行なわなかったことにはならない。ヘラクレイデスが理性を容認したとはどういうことか、またいかなる理由で容認するにいたったのか、さらに、他の後期経験派も同様の仕方で容認したのか、また、初期の経験派が理性を容認しなかったとしても、彼らが体験の一般化などの働きをすべて記憶に帰属させたと言えるかどうか、検討しなければならないのである。

V. 経験派の歴史的変遷：素描

そもそも初期経験派は、体験の一般化等の働きをすべて記憶に帰属させえたのであろうか。初期経験派は、魂の内に、幾つかの活動の源泉、座としての記憶を想定しえたのであろうか。種々の活動の座としての、魂の内なる記憶は、直接の観察の対象となりえず、それを認めることは、不明瞭な事物の把握不可能を主張し、身体内部について知ろうとする生体解剖の有効性さえも否定した (Celsus, *De medicina*, Prooemium, 40ff.) 経験派の基本的立場と相容れないように思われる。事実『経験派の概要』において *mnêmê* (記憶) という語が使用されるときには、基本的には記憶された個々の法則的認識・経験 (50,23-25; cf. *De sect. ingr.*, cp.2), あるいは、見られた事柄の魂における残留 (50,31-51,1) を表すために用いられており、種々の活動の源泉としての記憶 (記憶能力) を表すためには用いられていない。すでに見たとおり、経験は法則的認識ではあっても、「常に (あるいは大抵の場合に・・・) こういう結果になる」という一般化された認識ではなく、「今までのところ、常に (あるいは大抵の場合に・・・) そうなった」という過去形で表される認識であり、記憶能力が一般化を行なったとは考えにくい。むしろ、「記憶にとどめる」(*tê(i) mnêmê(i) parathemenoi*, 58,12-3) という表現に見られるとおり、記憶 (*mnêmê*) とは「記憶能力」ではなく、過去の体験の蓄積であると考えられる。もちろん理論派なら *mnêmê* を「記憶能力」の意味で用いるかもしれない。しかし、経験派は普段から、理論派の語法を意識的に避けているのである³²⁾。

では Frede の言う *memorism* ではないとしたら、初期の経験派はどのような立場をとったのであろうか。この問題に関する詳細な議論は今ではできないが、初期から後期への経験派の変遷をどう理解するか、素描を試みてみよう。

初期の経験派が種々の活動の座としての理性 (理性能力) を認めず、*memorism* の立場もとらなかったとしたら、経験の一般化や推理・推論も行なおうとしなかったのであろうか。いやむしろ、彼らはまったく自由にそれらの活動を行なったと考えられる。例えば、記憶能力の存在を認めなくても——ただし否定するわけではない——、色々な物事を自由に記憶し、思い出すことはできる。普通人々は、特に反省を迫られないかぎり実際そうしている。同じことは理性能力についても言える。人々が一般に、理性能力の存在云々について考えもしないで、考察し、判定し、一般化し、推理しているのと同様に、経験派も理性能力の存在を認めなくても、そういう活動を行なうことができるのである。もしもヘラクレイデスが、最初に理性能力を容認した経験派であるとすれば、その意味は彼が最初に、理性能力の存在を主張した、ということであろう。実際、テキストには「ヘラクレイデスや他の自称経験派の人たちが考えているように、我々の魂の内に何かこのような能力が存在するなら (*ei d' esti tis toiautê dunamis en tê(i) hêmetera(i) psuchê(i)*, 87,11-12; *si vero est aliqua talis virtus in anima nostra*,

87,12-13)と記されている。そしてこのことは、彼に先立つ経験派が、理性能力の行使を拒否したのではなく、理性能力の存在を認めなかったことを示唆するのである。こうして初期の経験派は、不明瞭な物事に関わらないかぎり、一般の人々同様、自分が行なう思考活動について反省し考えてみることなく³³⁾、理性的考察を行ない続けたと考えられる。経験派は、類似するものへの移行を医術の部分として使用することと、ただ使用することとの違いを重視している(*Sub. emp.*, cp.4)。メノドトスによれば、セラピオンは、類似するものへの移行を医術の構成的部分とは考えなかった、ということであるが、そのことは、セラピオンが、もう一つの選択肢——類似するものへの移行をただ利用すること——を採用したことを意味するのであろう。また類似するものへの移行だけでなく、理論派の目には理性の働きと映る他の諸々の活動についても、セラピオンはじめ初期の経験派は、これらを医術の部分としてしまうことなしに、ただ利用し、遂行したにちがいない。

もちろんこのような無反省の利用に対しては、何の根拠があって利用するのか、理性の存在も認めないものがそのような利用を行なうことが許されるのか、という反論が突き付けられるかもしれない。そのような反論の前に、無反省の利用は許されなくなると感ずる人もいるであろう。しかし、少なくとも反論に直面するまでは利用して全然差し支えないであろうし、反論が突き付けられた後でも、普通の人々が無反省の利用に何の支障も感じないように、経験派も、正当化の要求を無視して、利用しつづけることはできる。例えばピュロン主義者は、理性の存在について疑問を差し挟み判断を保留するが³⁴⁾、しかし、判断保留をしつつも、現われに注意を向けて生きていくことができる。彼らの行為の規準は現われである³⁵⁾。現われを規準として彼らが生きていく場合に導きとなるものの一つは、自然の導きであり、それに従って、人間は生まれつき感覚能力と理性能力(思惟能力)をもっているものとして生きて行くのである(huphêgêsei men phusikê(i) kath'hên phusikôs aisthêtikoi kai noêtikoi esmen, Sextus Empiricus, *PH*, 1,23-24)。これは現われに基づいて言われていることであるから、感覚能力の存在や理性能力の存在に関する断定を含意しない。ちょうど、私の理解するところの初期経験派が、記憶能力の存在も理性能力の存在も意図しなかったようなものである。しかもそれらの存在を主張しなくても、感覚能力、記憶能力、理性能力の行使と見られる行為をなすことができるのである。

経験派の中には、正当化のできない利用は承認できないと感ずる人もいたかもしれない。カッシオス(紀元前後)が類似するものへの移行を利用すべきではないと主張したとすれば、彼もその一人であったと考えられる。あるいは、『経験派の概要』第4章のこの箇所について別の読み方を採用し、「カッシオスの意見では、セラピオンは類似するものへの移行を利用しさえしなかった」と考えるなら、おそらくカッシオスは、自分が正しいとみなす立場を、経験派の著名な先人であるセラピオン(*Sub. emp.*, 43,4)にも帰そうとしたのであろう。しかし、そのような同輩の存在にもかかわらず、経験派は類似するものへの移行を利用しつづけたにちがいない。

彼らは何らかの正当化を行なったのであろうか。もしも行なったとしたらどのような種類の正当化がありえたであらうか。

理論と経験という本論文の主題から振り返って見るなら、正当化にも2種類のものが考えられる。一つは、我々の観察、感覚から遠ざかり、理性的に把握される根源的な原理へと向かい、そこからの体系的・理論的演繹によって正当化する方法、いわば理論派の正当化であり、もう一つは、あくまでも観察の次元で動き、常にあるいは大抵の場合これこれであることが観察されているから、という理由を挙げる正当化の方法、経験派の方法である。『経験派の概要』第7章には、理論派のみならず経験派も原因・理由の説明や証明を行なう、ただし観察に基づいて行なう、と記されている(63-4)。類似するものへの移行を正当化する場合にも、彼らは観察に訴えることであろう。つまり、同じ治療を類似した疾患に適用したり、類似した部位に適用したり、あるいは同じ病気に類似した治療を適用したりすることが有効であることが、観察されているから、と主張するであろう。もちろんこの観察は、最初は偶然的な体験、あるいは即席の体験によって得られたのかもしれない。しかし、何度も試してみれば、つまり模倣による体験を行なえば、この観察が正しいことが確認され、そしてついには、「類似したものに移行することは大抵の場合に有効であった」という法則的認識・経験が成立するのである。『経験派の概要』第9章(70)には、「経験派が類似するものへの移行を行なうべきだと考えるのは、類似したものは類似した結果を生み出す等々のことを体験を通して知ったからにほかならない」と記されているが、これは、今挙げた正当化の次第を伝えていると思われる。

ある経験派の人々は、本来は医者が行なう活動にすぎない実見と、記録と、類似するものへの移行を、誤って医術の構成的部分と呼んだということである(*Sub. emp.*, 51-2)。これは、今言及した種類の正当化が、類似するものへの移行のみならず、実見にも、記録にも適用され、「実見された治療は、大抵の場合に有効であった」とか、「記録の利用は、大抵の場合に有効であった」という法則的認識・経験が成立し、そのことによって、実見と記録と類似するものへの移行そのものが、医術の一部、つまり経験になったと誤解されたからだと思われる。つまり、それらのそれぞれが、医術構築の道具(*organon*, *De sect. ingr.*, 3, 24)でありながら、医術の一部に取り込まれることになって、構成的部分と呼ばれることになったが、しかしそれは誤解の結果である——そう解釈できるのである。なぜなら、それぞれの方法に関する認識が経験になったのであって、それぞれの方法が経験になったのではないからである。

また同じような観察に基づく正当化は、*epilogismos* についても行なわれたと考えられる。すなわち、経験派は、それが理性能力の働きであるから許容するのではなく——そもそも理性能力なるものは把握不可能であると主張する——、多数の観察によって有効性が確認されてきたという事実に基づき許容するのである。

経験派の中には、一般化、推理、またそれらによる判定等々が有効であるとしたら、それらを支えている能力があってもいいはずだ、と考えた人もいるかもしれない。ヘラクレイデスや、

ほかにも自称経験派の人々が、矛盾する事柄や、帰結してくる事柄を考察し、判定する何らかの能力が魂に具わっていなければならないと考えたという、Frede が注目していた箇所 (*Sub. emp.*, cp.12, 82, 3-20) も、この線で考えることができる。Frede は、ヘラクレイデスがピュロン主義という外部からの影響のもとに、理性を認めるにいたったと考えるが、それよりも、経験派が観察に基づく正当化を行なうその延長線上に、ついに *epilogismos* を行なう能力を想定する人々が現われた、と考える方が適当であると思われる。少なくとも、経験派の外部に影響をもたらすものを求めるよりも、内部に発展の必然性を求める方が適当であると思われるし、またヘラクレイデスが、魂内部に理性的能力が存在すると考えた、という線で当該テキストを読むことができるということは、ピュロン主義の影響をむしろ排除する要因となるのである³⁶⁾。

しかしともかく、このような能力を想定することは、不明瞭な事物の把握を否定する経験派の本来の立場とは異なるであろう。ガレノスがこれらの人を、自称経験派と呼んでいるのも (*Sub. emp.*, 87,14-15)、そのためであると思われる。事実、メノドトスはそのような能力を認めてはいない。彼は *epilogismos* を導入しつつ、感覚、あるいは観察と記憶のみに頼るという立場を貫いているのである (87,23-88,2)。この点は、ガレノスによってメノドトスの矛盾として指摘されているが、しかし、先にも述べたように *epilogismos* は、観察を通して正当化されたものであり、そしてそのようにして正当化された *epilogismos* を認めることは、理性能力を認めることとは異なるのである。概してガレノスはメノドトスに厳しく (*Sub. emp.*, 84; 87,23-88,10)、その厳しさが理解を欠いた批判を生んだことは十分予想される。

以上が、初期経験派から後期経験派への変遷に関する私の素描である。そこでは、多少の揺れ、逸脱はあるものの、観察と記憶のみに頼り、不明瞭なものは把握不可能であると考え、そして理性能力の存在も想定しない経験派の基本の立場が、結局は貫かれているのである。

VI. ピュロン主義と経験派

最後にセクストスが経験派について加えていた批評をどう解するか、という問題に簡単に触れておきたい——ただし、この主題についてもより詳細な考察が必要とされることは勿論である。簡単に言えば、経験派は不明瞭な事物の把握不可能を主張している点で、判断保留をするピュロン主義とは一致しない、従ってまさにセクストスの言うとおりである、ということになる。すると問題は、むしろ、どうして一致しないにもかかわらず、セクストスはピュロン主義者かつ経験派でありえたのか、またほかにも多数の人々がそうだったのか、ということになる。一般には、セクストスの経験派に関する発言は、経験派に対する批判であり、彼は方法論派の方を高く評価していると考えられている。しかし、本当にそうであろうか。セクストス『ピュロン主義哲学の概要』第1巻237節は、ピュロン主義者は四つの領域において、普通の生活で行

なわれているところから従って行為する、と記しているが、その一つは、確かに方法論派が従う身体的情態の導きである。しかし、四つの導きの内には、諸技術の教えも含まれている (cf. also *PH*, 1, 23-24)。医学上の経験派であるセクストスは、他の領域では判断を保留しても、医術の分野では経験派の教えに従うのが当然であると考えたかもしれない。方法論派は、医術という伝統を捨て去り、*Ars longa, vita brevis* ではなく、*Ars brevis, vita longa* (*hê men technê bracheia, ho de bios makros*) (*De sect. ingr.*, 14, 24ff.) とうそぶいていたと伝えられるが、まさにこの、技術とその伝統を無視している点で批判されるべきものである。ピュロン主義は、医術も含めた四つの領域において、現われているものにはそのまま従い、有益であると思われるところを得るようにと教えている (*PH*, 1, 237)。そして、医術の領域において、経験派の医者（セクストス）に現われているものが何かというと、すでに見たとおり、真理探求よりも患者の治療を目的とすること、そのために治療に役立たない理論は廃すること、不明瞭な事物は把握不可能であるとみなすこと、等々なのである。真理探求というコンテキストの中では、ピュロン主義者は感覚や理性を用いて真実を求め、そしてついに判断保留をするに至るが、患者の治療というコンテキストでは、目的は健康回復にある、あるいはそう現われている以上、セクストスも含め経験派は、健康という目的を追求する。彼らには不明瞭な事物は把握不可能であると現われている以上、セクストスも医者としては把握不可能を主張する。実際、治療に専心するためには、把握可能・不可能について判断を保留するよりも把握不可能を主張した方がよいであろう——把握可能かもしれないと思うと、探求に邁進して健康回復の目的がおろそかになるかもしれない。しかし医者としての立場は、探求を志す *philosophos* として把握可能・不可能について判断を保留することと矛盾しないのである。

注

- 1) Cf. Frede (PMA), p. 228.
- 2) Cf. Frede (PMA), pp. 231-3.
- 3) Cf. Frede (PMA), p. 234.
- 4) Cf. Lloyd, pp. 147ff.
- 5) *Sub. emp.* は本論文の主要テキスト『経験派の概要』の略。その他の主要テキストについては、文献表参照。
- 6) 経験派はそのほか、観察 (*têrêsis*) を重視するところから「観察派」(*têrêtikê*)、記憶 (*mnêmê*) を重視することから「記憶派」(*mnêmoneutikê*) と呼ばれた。また理論派は、ドグマ (*dogma*) を立てるところからドグマティスト (*dogmatikê*)、*analogismos* (類推推理) を用いるところから *analogistikê* (類推推理派) と呼ばれた (*De sect. ingr.*, 2, 5-11)。
- 7) ちなみに主要な経験派を列举すると、(1)セラピオン (前200年頃; 事実上の創始者); (2)カッシオス (カッシウス) (紀元前後); (3)タラスのヘラクレイデス (前75年頃); (4)メノドトス (2世紀前半); (5)テオダス (2世紀前半); (6)セクストス・エンペイリコス (おそらく2世紀) を指摘できる。
- 8) アクロンは、前5世紀のエンペドクレスと同時代の人。経験派が歴史の古さを誇示するために、最

初の経験派と呼んでいるだけである。

- 9) セクストス『ピュロン主義哲学の概要』第2巻99節は、徴証(sêmeion)の2種類——想起的(hupomnêstikon)な徴証と開示的(endeiktikon)な徴証——を区別し、一時的に不明瞭なものは想起的な徴証を通して把握され、本性上不明瞭なものは、開示的な徴証を通して把握される、と言っている。例えば、煙が火を連想させる場合は、煙は火の想起的徴証であり、身体における諸々の動が魂の存在を予想させる場合は、身体の動は魂の開示的徴証である(100節)。そしてさらに、開示的徴証は、ドグマティストによる作り事と思われるとされ、批判の対象となっている(102節)。
- 10) 注6を参照。
- 11) Cf. têrountes kai memnêmenoi ti sun tini kai ti meta ti kai ti pro tinos eidomen ..., 58,14-18.
- 12) *Sub. emp.*, 50,25-51,9; 55,27-57,2; 59,2-23; 62,11-18; 63,10-15; 66,26-27; 81,3-11.これと関連して、医術をその部分に分割する仕方に関してもこだわらない。53,5-27参照。
- 13) Cf. Galenus, *De experientia medica*, cp.20; cp.16 (=Frede (G), pp.81ff.; 74ff.).
- 14) セクストス『ピュロン主義哲学の概要』第2巻253節を参照。
- 15) hekontes epi to peirazein aphikôntai ê hup'oneiratôn protrapentes ê allôs pôs doxazontes, 3,3-4.
- 16) アリストテレスについては, *De anima*, 3,10,433a9-30; 433b27-30; 434a5-7; *EN*, 6,2,1139a17-1139b5; *EE*, 2,6,1222b18-21; 2,8,1224a25-30; *Phys.*, 2,6,197b6-8などを参照。ストア派については, Alexandrus, *De Fato*, 205,28 (SVF 2.1002); Simplicius, *In Cat.*, 306,25-7 (SVF 2.499) (306,26の plattein は Sorabji, p.113,n.36にならって prattein と読む); Cicero, *De Fato*, 41,43 (SVF 2.974); *Acad.*, 2,37-9; Aulus Gellius, *Nocte.*, 7,2,7-11 (SVF 2.1000); Origenes, *De Principiis*, 3,1,2-5 (SVF 2.988)などを参照。
- 17) アリストテレスについては, *De mot. anim.*, 11, 703b2; *EN*, 3,1,1111a25-6。ストア派については, Origenes, *De Principiis*, 3,1,2-5 (SVF 2.988)を参照。
- 18) 分類の仕方にこだわらないことについては, *Sub. emp.*, 53,5-27を参照。
- 19) Frede (EVKM), pp.232ff.
- 20) Frede (EVKM), pp.243ff.
- 21) Frede (AE), pp.248-9.
- 22) Frede (AE), pp.256-7.
- 23) Frede (AE), p.248.
- 24) Frede (AE), p.252.
- 25) Celsus, *De medicina*, Prooemium, 28; 31; Galenus, *De sect. ingr.*, 11,22-12,4.
- 26) Frede (EVKM), pp.232-4; Frede (AE), p.248.
- 27) Frede (AE), pp.249-51.
- 28) epilogismos という言葉, および epitechnêsasthai という語も, 何らかの理性的推理を含むと思われるし, また Frede (AE), p.248の次の言葉も, 彼が epilogismos の内に何らかの理性使用を認めたことを示唆する。the early Empiricists seem to go out of their way to avoid having to acknowledge any legitimate use of reason in the acquisition of medical knowledge, even if this involves them in utter implausibility. Thus Galen in *De methodo medendi* (K. 10,164) reports how the Empiricists maintain that some composite drugs were found by accident, perhaps because someone accidentally poured the ingredients together and then the mixture got administered, when in fact it is so obvious that the composite owes its origin to the fact that someone figured out that, as the ingredients all individually have

the same effect ... their composition in one drug would greatly increase the chance of effectiveness. 同じ効果をもつ薬を混ぜ合わせるよう促す推論が、『治療学の方法』において epilogismos による推論として記されているものである。

29) explicitly and under this heading, Frede (EVKM), p.233.

30) この箇所種の読みに関しては, Deichgräber, SS.12-13を参照。

31) acknowledge a place for reason, Frede (EVKM), p.233.

32) 経験派は, 理論派のような厳密な語法を避けるし (注12を参照), また理論派との名称の共有も避けるのである (cf. 62,27-63,1)。

33) この点で Frede が理解する意味での後期経験派とは, 立場が異なる。

34) この点については, 金山弥平「理性と古代懐疑主義——人間と非理性的なもの——」(準備中)を参照されたい。

35) これが「行為」(prattein)の規準と言われていることに注意されたい (PH, 1,21)。アリストテレスやストア派にとっては, 理性的な行動, しかも承認ないし判断と, それに基づく決定の介在する行動でなければ, 行為と呼ばれなかった (注16に記した諸箇所を参照)。これに対して, 判断保留をする懐疑主義者は, 自分たちの行動が判断を含まなくても「行為」と呼ぶのである。これはアリストテレスやストア派の立場に対する意識的訣別と考えられる。懐疑主義者にとっては, 判断を含まなくても, 無反省に理性能力の行使とみなされる行動に出ることはでき, その意味で理性が介在しているともみなされ (アリストテレスが第三者の立場で見ていたら, 理性が介在しているともみなすであろう), その行動は「行為」と呼びうるものなのである。

36) またもう一つ疑問がある。ヘラクレイデスが一応前75年頃の人であるとすれば, その頃のピュロン主義はどのような影響力をもつ動きであったであろうか。もちろん, ピュロンの伝統はあるが, ピュロン主義そのものは, 前1世紀にアイネシデモスがアカデメイアから離反し, ピュロンの名を借りて, 真の懐疑の伝統に立ち返ろうとしたことに始まり, しかもアイネシデモスは, ヘラクレイデスの弟子であると考えられるのである (DL, 9,116)。ヘラクレイデスが, はたして弟子のアイネシデモスから影響を受けることができたか, あるいは, ピュロンから影響を受けたのか, いずれにせよもっと詳しい検討が必要とされると思われる。

文献表

著者名の後に記した [] が略称を表す。

主要テキスト

K.Deichgräber [Deichgräber], *Die griechische Empirikerschule*, Berlin, 1930.

Galenus [Sub. emp.], *Subfiguratio emperica* (『経験派の概要』) (in Deichgräber).

頁と行は, この Deichgräber 版による。翻訳としては, 英訳に *An Outline of Empiricism* (in Frede (G)) があり, また和訳に, 金山万里子, 「ガレノス『経験派の概要』(1・2)」(大阪医科大学紀要『人文研究』第19・22号, 1988・1991年) がある。

Galenus [De sect. ingr.], *De sectis ingredientibus* (『諸学派入門』) (in G. Helmreich (ed.), *Galenus Pergameni Opera Minora*, vol.III, Leipzig, 1893).

頁と行はこの版による。英訳が Frede (G) に収められている。

Galenus [De meth. med.], *De methodo medendi* (『治療学の方法』) (in C.G.Kühn, *Galenus Opera Omnia* X, Leipzig, 1825).

第1, 第2巻の英訳が, Galen, *On the Therapeutic Method, Books I and II*, tr. with an Introduction and Commentary by R.J. Hankinson, Oxford, 1991として出ている。

研究文献

- M.Frede [Frede (G)], *Galen: Three Treatises on the Nature of Science*, translated by R. Walzer and M. Frede, Indianapolis, 1985.
- M.Frede [Frede (EAP)], *Essays in Ancient Philosophy*, Oxford, 1987.
- M.Frede [Frede (PMA)], 'Philosophy and Medicine in Antiquity' (in Frede (EAP)).
- M.Frede [Frede (AE)], 'The Ancient Empiricists' (in Frede (EAP)).
- M.Frede [Frede (EART)], 'The Empiricist Attitude towards Reason and Theory' (in R.J. Hankinson (ed.), *Method, Medicine, and Metaphysics*, Edmonton, 1988).
- M.Frede [Frede (EVKM)], 'An Empiricist View of Knowledge: Memorism' (in S. Everson, *Epistemology*, Cambridge, 1990).
- G.E.R.Lloyd [Lloyd], *Magic, Reason and Experience. Studies in the Origins and Development of Greek Science*, Cambridge, 1979.
- R.Sorabji [Sorabji], *Animal Minds and Human Morals. The Origins of the Western Debate*, Ithaca, New York, 1993.

* 本論文は、文部省科学研究費補助金（一般研究（C））による研究の一成果である。